

大山郁夫と早稲田大学

黒川 みどり

※ 二〇一七年は本学元教授で「大正デモクラシー」の旗手として活躍した大山郁夫が、一六年におよぶアメリカ亡命から帰国して七〇年目にあたる。この機会に際し、同年一〇月二三日、大学史資料センターが担当するグローバルエデュケーションセンター設置科目「『早稲田学』の探究^a（人物で探る早稲田）」において、公開講義「大山郁夫と早稲田大学」を開催した。講師には日本近現代史が専門で『共同性の復権―大山郁夫研究』のご著書のある黒川みどり氏（静岡大学教授）をお迎えした。この論稿は、当日の記録を基に、黒川氏が加筆・修正を加えられたものである。

当方の依頼をご快諾いただいた黒川氏に心より感謝申し上げます。

（大学史資料センター）

はじめに

大山郁夫という名前は、私の高校時代は、頻度数はそんなに多くなかったのですが、労働農民党の委員長としてまだからうじて日本史の教科書にも出てきていました。ところが今や教科書にも登場しなくなって、学生のみなさんに

はあまり馴染みがないかもしれません。

大山郁夫は、一八八〇年、兵庫県の赤穂に生まれ、一九五五年に亡くなりました。その生涯は、おおよそ三つの山として捉えることができます。一つは大正デモクラットとして活躍した時期です。民本主義を説いた吉野作造はとて有名ですが、実は同時代にはその吉野とほとんど同じような主張を展開し、かつ同じような知名度を保持しており、大山もまた大正デモクラットとして出発しました。二つ目は、先ほど申しました、労農党の「我等の輝ける委員長」として活躍した時代、三つ目は、戦後、平和運動に自分の領分を見出しその結果「スターリン平和賞」を受賞することにもなった時期、そんな三つの山があります。

大山の著作については、彼の生前に『大山郁夫全集』全五巻（一九四七～四九年、中央公論社）が刊行されており、死後まもなく大山郁夫記念事業会編『大山郁夫伝』（一九五六年、中央公論社）もまとめられまして、そのことも大山の基礎的研究として大いに貢献しました。その後、先ほど申し上げた第一の山までに限定されていますが、早稲田大学のスタッフが中心となって、『大山郁夫著作集』全七巻（一九八七～八八年、岩波書店）が刊行されました。ここでは、東京大学の吉野に対抗しての『早稲田の大山』の復権という雰囲気もなきにしもあらずでしたが、いうまでもなく大山はそれを超えて、近代日本を代表する知識人のひとりであり、それゆえ私は、大山を通して、知識人と民衆の問題にとり組みたいと考えることができました。拙著『共同性の復権―大山郁夫研究』（二〇〇〇年、信山社）はそうした問題関心によるものですが、今日は早稲田学ですので、早稲田大学との関わりを軸にしながら、大山を捉え返してみたいと思います。

そうしますと、以下のようなテーマが浮かび上がってきます。一つは、政学部（政治経済学部の前身）に入学し、浮田和民の門下でその影響を受けながら、自分の学問を作り上げていったことです。二つ目には、「早稲田騒動」と称

される、天野為之と高田早苗のどちらが早稲田大学学長になるかという対立を含みつつひき起こされた、大学の中の紛争がありました。大山はその問題に関わりながら大学改革を志したことです。三つ目は、早稲田騒動で早稲田大学を辞め、ふたたび早稲田大学に戻ったあと、『政治の社会的基礎』（一九二三年）を書いて、いわゆる「科学としての政治学」というものを樹立していったことです。ただし、大山はその後思想がどんどん変化していきますので、決してこの『政治の社会的基礎』で大山の思想・学問がとどまったわけでもないし、これをもって大山の学問の全容を捉えることはできないのですが、ともあれ早稲田大学教授時代に生み出した重要な学問的業績です。四つ目には、早稲田大学内で「軍事研究団事件」そして「研究室蹂躪事件」と相次いで大学擁護運動が盛り上がる、その渦中に大山がいたことです。そして五つ目は、大山は労農党委員長に迎えられますが、早稲田大学教授と労農党の党首の兼任問題が浮上し、結局それがもとで学生から退学処分者も出すという「大山事件」に発展し、教授会の決定で、早稲田大学を辞めることになったことです。七つ目は、一六年間のアメリカカ亡命から帰ってきて、定年までの三年間ではありましたが三たび早稲田大学に迎えられたことです。

以上のようなトピックを軸に、お話を進めていきたいと思います。

一 西洋文明との出会い

——東京専門学校入学～早稲田大学高等予科英語教員～留学

(一) キリスト教信仰

ここでは、大山の生い立ちに簡単に触れた上で、大山が早稲田大学を卒業したのち、高等予科の英語教員を経てア

メリカ・ドイツに留学に行く、そのあたりまでのところをまず一つの時期としてお話をさせていただきます。

大山は、一八八〇（明治二三）年、福本郁夫として兵庫県の医者の子の下に生まれました。父親は、貧しい人からは医療費は取らなかつたため、経済的には豊かではなかつたようです。しかし大山にはぜひ上級学校に進学させたいと考え、その費用を支援してくれる神戸の銀行員大山辰一郎・クラ夫妻の養子にします。大山は養父の下で早稲田大学に進むことになり、一九〇一（明治三四）年八月、東京専門学校（一九〇二年、早稲田大学と改称）政学部に入學します。英語が好きだったので英語政治科に入學するのですが、養父母には銀行員の後継ぎをしてほしいという期待があつたため、商業科進學と偽つておりました。

大山は、この在學中に、キリスト教をはじめとする西洋文明との出会いを経験します。吉野作造（一八七八—一九三三年）をはじめこの世代は、西洋文明を体現するものとしてキリスト教に魅かれる者が多く、大山も同様でした。

大山は、東京一番町教会—飯田橋の近くにあり、のちに富士見町教会と称します—で、植村正久から洗礼を受けます。生涯キリスト教信仰を持ち続けた吉野とは異なり、大山は、大学を卒業して教員になつたころには教会には行かなくなつており、だんだんキリスト教から離れていきました。しかしながら、この學生時代に牧師になることを決意していた時期がありました。養父母の反対に遭いすぐに翻意するのですが、そのことは、一九〇四年八月一四日付の養父宛書簡から明らかになつてきたものです。興味深いので、その書簡を紹介してみたいと思います。

　　意思是我がものながら我が力を以て動すことを得るものに候はねば心に養ひ得たる信仰は如何ともすること能はず候へども決して之がため偏強の癖に陥ることなく決して之がために父上母上の御心を傷め御名を傷つくることは必ず可無之決して之がために大山家の名譽財産に累を及ぼすことは致すまじく又一たびたてたる牧師宣教師とならんと企望も此際断然断々然これ

を棄て、再び之を顧ること可無之候 あはれ誤つて伝道者流の宗教に陥りはて、真の宗教を誤解し、ために一方ならず父上母上の御胸を傷め御心を悩ましたる罪は幾重にも御有るしを乞ひ申候 あはれ悔恨の涙の熱さを察したまはゞ何卒これを容れ賜はんこと、小生がせまき胸一ぱいの願ひに候

大山は、牧師になろうとしたことは自らのキリスト教に対する理解の誤りであつて、真の宗教を誤解してしまつた、伝道者流の宗教に陥つてしまつたといつて翻意し、同時に養父母に心痛を与えたことを謝罪をしているのです。

このような、大山の牧師への志には、やはり彼の社会改革、社会変革への使命観が貫かれており、その後社会運動に挺身していく彼の生き方と重ね合わせますと、それが牧師という形で表れたものだったのでないかと思ひます。大山が政治学を勉強し、具体的な政治構想を持ち、そしてまた社会運動に挺身していくなかで、牧師志願はそれらに取つて代わられていったのではないかと思ひます。なお、卒業時の政治経済学科の記念帳『金欄簿』には、信仰欄に「基督教」と記されています。

大山は、一九〇五年七月、早稲田大学政治経済学科を主席で卒業し、同年九月より一年間、学費免除の特待研究生を務めたあと、翌一九〇六年六月、早稲田大学高等予科英語教員に就任しました。

養父母に対する恩義との葛藤は、ほかの点でも大山につきまといました。大山は、一九〇六年、学長の高田早苗の仲介によつて、水野りゆう（通称柳子）と結婚します。しかし、養父母は、柳子に「大山家」の「家風」を習わせる必要があるという理由で、柳子は大山と離れてしばらく神戸の養父母のもとで暮らすことを余儀なくされました。その間、大山が柳子に「東京日記」と題して送り続けた手紙が残されており、それは柳子への溢れ出る愛情とともに、大山の家庭観、女性観をうかがい知ることのできる貴重な史料となっています。そのなかで大山は、柳子と離れて暮

らさなければならぬことについて、「只自分の不運を嘆くのみだ」と記しています。また、婚姻届が出されたのは、第一子の妊娠がわかってからのことでした。

このように、大山には養父母の重圧がのしかかっていたのでした。そういうなかで、大山にとってキリスト教は、内面の信仰というよりは、むしろそうした「家」の重圧に抗する拠り所としての西洋精神文明の源泉だったのでないでしょうか。

大山は、英語教員時代に、『早稲田学報』に何回か英語で論説を書いており、そのなかの『Woman's Education in Japan』において、キリスト教の精神文化の意義を二つ挙げています。一つは日本の道德水準を引き上げるものとして、二つ目は、人格の向上、特に女性の品格を陶冶し、女性のいわゆる解放をもたらすという点においてです。

大山は、自分の妻に対して、「保護者としての職務」を求め、「内助の功」の必要をいいました。しかし彼は一方で、妻に「対等の人格」も求めました。「女としての人格 (Womanhood)」を期待したのです。いわゆる良妻賢母主義の枠内ではありましたが、一面で「家」と抗いつつ、夫婦中心の「ホーム」を築こうとしたのでした。

大山のキリスト教的なヒューマニズム精神は、学生時代には、足尾鋇毒事件反対運動に対する共感ともなって表出しています。第一線に出て運動をした形跡はありませんが、東京専門学校(現在の早稲田大学)の学生たちの参加があるなか、大山も関心を示し、後年の回想の中で、田中正造に非常に影響を受けたことを告白しています。また、田中正造が一時期住んでいたという早稲田鶴巻町の下宿の一室に、わざわざ移り住んだともいわれています。

キリスト教を媒介とした「懇談会」の試みもありました。一九〇五年のことです。これには、吉野作造、島田三郎、海老名弾正、木下尚江、小山東助、そして大山と早稲田大学の同級生である永井柳太郎が集いました。しかしみんなそれぞれに忙しく、これといった成果も挙げないままついえ去ってしまったようですが、その試みは、次代を担う青

年たちが「立憲政体」への「期待と忠誠」（松沢弘陽『日本社会主義の思想』一九七三年、筑摩書房）という共通項で集まったものであったといえましょう。

（二）「倫理的帝国主義」の継承

次に、大山が早稲田大学で学問的に最も影響を受けた人物としてあげる浮田和民の「倫理的帝国主義」、これをどのように継承していったのかについて述べておきたいと思えます。大山自身は、「私は、小野梓、それから浮田和民の両先生から大きな感化を受けた」と言っていたそうです（大山郁夫記念事業会編『大山郁夫伝』一九五六年、中央公論社）。とりわけ、浮田には、故浮田和民先生追悼録編纂委員会編『浮田和民先生追悼録』（一九四八年）に一文を寄せて、ここで「個人的にも先生と接触があつた」と述べています。この当時、まだ短いもので数も限られていますが、大山は、特待研究生になった日露戦後から、論説をいくつか書いて執筆活動を開始していくことになりました。その頃の大山の国家認識は、大枠においてこの浮田の影響下にあったといつていいと思います。

浮田和民は、一九〇一年ごろから「倫理的帝国主義」を提唱していきました。浮田は熊本バンドのメンバーの一人で同志社英学校の最初の卒業生であり、このころ早稲田大学で教鞭を執っていました（一八九七～一九四一年、在職）。

帝国主義に「倫理的」がつく、それはどういうことなのかというと、侵略的な膨張主義、武断的な帝国主義とは一線を画する、そして、あくまでも国際法の下に経済活動を主体として、世界的な生存競争を経て世界文明のために貢献していく、そして「実業上の大日本帝国」になることをめざす、そういう考え方を、浮田は「倫理的帝国主義」といったわけです。さらにそれを支える「国民精神」の自由な発揚が必要なのだとすることで、国民の啓蒙にも力を注いでいきました。

「倫理的帝国主義」においては、そのような活動を規律するものとして求められたのが、「倫理的」であること、すなわち「道徳」であって、大山もその影響のもと、浮田とほぼ同じ位相にあつて、「道徳」というものに期待をかけていきました。そしてそういうオプティミズムが、この後述べていきます「社会進化論」という、進歩主義的歴史観と結びついていました。

浮田の「倫理的帝国主義」を学んだ大山は、日露戦後の「一等国」意識の下での国民的使命観を横溢させながら論陣を張っていくこととなります。「一等国」というのは、夏目漱石のこの時期を舞台にした小説を読みますとさかんに出てきますけれども、「大国」ロシアに勝ったという自信と安堵感に支えられたもので、大山はそういう意識のなかで自分の学問を形成していったわけです。しかし、「一等国」になったという自負と同時に、大山はその一方で、「文明」の裏側にある「道徳的退廃」にも目を向けていきました。それが、先ほど述べた足尾鋳毒事件反対運動などへの共感ということに示されています。

大山は、浮田にもみられる社会進化論からスタートしていくことになり、政治経済学科の卒業論文「産業進化に関する学説の比較」では、産業進化が社会進化論によって説明されていました。先にも述べましたように、首席で大学を卒業した大山は、卒業論文も、『早稲田学報』（一九〇五年八月・九月）に、一部抜粋ではありますが掲載されていますので、卒業論文の大体のようすがい知ることができます。章立ては以下のとおりです。

卒業論文「産業進化に関する学説の比較」

第一章 社会進化の概念

第二章 産業社会の進化（第一、二章の節の構成は不明）

第三章 産業社会の学説に関する比較

第一節 総論／第二節 生産の形態より見たる経済組織の進化／第三節 交換の形態より見たる経済組織の進化／第四節 生産と消費の関係より見たる経済組織の進化／第五節 結論

このなかで、大山はこんなふうになっています。「社会進化の法則が完全に説明せらるゝは、少なくとも個人の意識及び社会の意識が完全に説明せられたる後ならざるべからず」。そういう留保を伴いながらも、ドイツのF・リストやアメリカの経済学者R・T・イーリーの学説に依拠しながら社会進化論に則って書かれたものでした。ちなみに、イーリーには *Studies in Evolution of Industrial Society* (一九〇三年) という著作がありますが、大山はこれを英語の授業の講義内容にも使っていたということですので、当該時期には、イーリーの学問的影響を受けていたと思われる。

大山のこの時期のもう一つの特徴として、「中庸主義」が挙げられます。これも浮田にもみられるのですが、大山はこの「中庸主義」から「東西両文明の調和」ということを説いています。「東西両文明の調和」は、徳富蘇峰が唱えたのを大隈重信が受けて広く発信していったもので、浮田、そして大山にも引き継がれていきます。

彼はまた、「倫理的帝国主義」の影響下に、「立憲思想」に対応した植民地経営ということも盛んに述べています。イギリスの文学者カーライルの影響がみられることも、注目すべき点です。カーライルはいろいろな知識人に影響を与えています。大山もカーライルに傾倒して、社会の改革のためには「英雄」が出てきて指導者にならないといけないという「英雄崇拜論」を唱えていました。そのような「英雄」志向が強いということも、この時期の大山の特徴です。

このように当該時期は、おおむね浮田和民の「倫理的帝国主義」の枠組みのなかにあったといえると思いますが、ただし浮田のほうが、「個」というものへのこだわりは強く、大山の方に、すでにこのころから集团的な志向が色濃くみられ、のちに民衆という集団に向き合っていく萌芽が見てとれます。

また、浮田は対外的な視点で経済発展にウエイトを置いて自論を展開していましたが、大山はどちらかというとそれよりも国内問題への関心のほうが強く、民衆運動の高揚に非常に敏感に反応していきました。

(三) アメリカ・ドイツ留学

大山は、一九一〇年から四年間、留学に出かけます。同年七月一日に、早稲田大学留学生とすることが早稲田大学維持委員会において承認されます。同じくこのときに留学が決まった齋藤朋之丞という人は年額一五〇〇円支給の公費留学生だったのですが、大山ともう一人巽来次郎は私費でした。したがって大山は、留学に当たっても、またもや養父母に留学費用の負担を依頼せねばならないことになりました。

大山は、九月にアメリカに向けて出発しました。ホノルル、サンフランシスコを経て、一〇月初めにはシカゴに到着し、シカゴ大学で二年間学ぶこととなります。

早稲田大学からこのころに派遣された留学生の一覧を見てみますと、一九〇二年に大学と改称して以後、大山が派遣された一九一〇年までに社会科学系留学生が一六名いるのですが、そのなかで留学先にアメリカを含んでいる者は、大山を含めて五名です。しかし一般的にはまだアカデミズムにおけるアメリカの地位は低く、第一次世界大戦期ぐらいまででしょうか、留学先は圧倒的にヨーロッパが主流でした。そういうなかで大山が、新興国アメリカを選んだということも、一つ注目しておいていいのではないかと思われれます。一九〇五、六年ごろ、すなわち大山が論説

を書くようになったばかりのころは、大山は文明のモデルを欧米全般ないしはイギリスに求めていましたが、留学の直前、一九〇九年前後から、関心をすでにアメリカへと移行させています。それも一つには浮田和民の影響が考えられ、さらに遡れば、大山がもう一人の師として名前を挙げました高田早苗が、イギリス流の政治学のみならず、東京大学在学時代にフェノロサに学んだことを契機にアメリカ政治学にも深い関心を寄せていて、『早稲田叢書』などを通じてアメリカの学問の紹介にも努めていた（内田満『アメリカ政治学への視座―早稲田政治学の形成過程』（一九九二年、三嶺書房）、そのことも、大山のアメリカへの関心の増大につながっていたのではないかと考えられます）。

大山は、シカゴ大学においてC・E・メリアムの下で勉学に励みます。メリアムは「現代政治学の祖」ともいわれられており、政治学の動態的なアプローチ、政治行動の分析の重要性を主張しました。さらには現実政治にも強い関心を持っていて、一九〇九年にはシカゴ市会議員にもなっていますし、落選したもののシカゴ市長選挙にも出た人で、心理学・社会学などの隣接諸科学を導入して、政治学の科学化を主張していきました。このようなメリアムの政治学に学んだということは、その後、日本に帰ってから展開される大山の学問・思想に大きな影響を与えずにはおこなかかったと思われる。

大山は具体的にはどんなことを勉強したのか、シカゴ大学に提出したターム・ペーパーの草稿しか残っていませんけれども、それらをもとにご紹介していききたいと思います。

大山自身が語るところによれば、具体的には政治学、殊に市政に関する研究をメリアムに、公法をフロイインドに、社会学をヴィンセント、スモール、そしてアメリカ憲法をホールに師事して勉強しました（『面影』・『早稲田学報』一九一五年一月）。そのときの苦勞をこのように回顧しています。

私は政治学及び公法学のセミナーで、同大学で盛名ある教授たるメリアム博士やフロインド博士にギューギューと云ふ目に遭はされたことがあることを今でも記憶して居るがそれも此頃では楽しい追憶の一つである。けれども此セミナーでの研究の結果を纏めて一論文に仕立て上げて、是等教授の満足を買った時の愉快は、私の学問生活の終わりの瞬間まで忘れられぬことであらふと思ふ（「シカゴ大学の思ひ出」・「大学及び大学生」一九一七年二月）

このシカゴ大学での二年間は、苦しくはあつてもそれを乗り越えて学問研究に専心することのできた、非常に充実した期間だったと彼自身も位置づけていることがわかります。

この間に大山が書いたターム・ペーパーおよび授業のノートは、全部で五八点残されています。これは、かつて早稲田大学現代政治経済研究所の仕事として私が「大山郁夫関係資料」の目録を作り、現在は大学史資料センターが所蔵していただいています。これらはすべてもちろん英文で、手書きないしはタイプで打ったものです。メリアムによる政党論やシカゴ市政に関する講義のノートをはじめ、地方自治についての書物の要約、さらにトーマス・モアの『ユートピア』についてのレポートなどもありまして、内容も広範囲にわたっています。しかし、大山独自の見解を述べた部分は少なく、どちらかといえば文献の要約や紹介に終始しています。したがって、これらから大山の考えを知るといよりは、どういうことを学んだかがわかる材料として貴重なものです。

大山の社会主義に対する知識は、空想的社会主義にとどまっていたわけではなくて、ターム・ペーパーのなかに、*The Conflict of Classes*、*The State Socialism in Germany*、*Socialism* の三点があり、すなわちそれらは二大階級対立を前提とした階級闘争、ゾンバルトの社会主義理論、ワグナーのドイツ国家社会主義などを論じたものでした。これらに記された内容が、どの程度までこの時点での大山の独自の見解であるかは判然としませんが、のちに大山が自己の思想として獲得していったものが少なくなく、とりわけゾンバルトの社会主義にしても、後述しますように、大山

が「社会改造」を模索しマルクス主義に到達するまでの過程で再発見し、紹介したものでした。

The Conflict of Classes のなかで大山が書いた次のような個所は、のちの彼の主張ともつながっていますので、ご紹介しておきたいと思います。

現代の労働者たちは、彼らの能率を維持するに十分なだけの賃金を支払われているだろうか。私が言うのは、産業上の能率だけでなく、同様に、人間としての能率も意味している。賃金生活者は、人間としての価値に値する生活をしているだろうか。財政資本の所有者たちの多くが、社会に全く尽くすことなくして不当に贅沢な生活を送っていることは、常に見られることである。しかし彼らと並行して、社会階級のさらに下に沈潜していく多数の勤勉な労働者たちを見ることはないだろうか。労働者たちの悲惨さが増大するとするマルクスの予言は、現実のものとならなかったのは真実だ。しかし同時に、我々の同志たちは、現代文明の恩恵を享受しているとはいえない。いやそこまでもいかなない。余暇を教養に使うことができないほどに、彼らは工場で懸命に長時間の労働をしていないだろうか。(邦訳―黒川)

このような問いは、先ほども述べましたように、第一次世界大戦後に大山が「社会改造」を構想していく際の基軸となっていて、そこで労働者が「人間らしく生きる」ことの大切さにこだわったことを彷彿とさせます。

大山が留学を終えて帰国してから二、三年の間は、第一次世界大戦の渦中であって、彼のナショナリズムも刺激され、国家的結合を維持することに関心が集中していきますが、その後の日本社会の変化にともない、留学中に修得していたこうした社会主義や階級闘争についての知識が、しだいに社会変革の道具として持ち出されてきたと考えるのが当を得ているのではないのでしょうか。のちに述べるような大山のめまぐるしいまでの思想の変化は、こうしてその拠り所となる理論が準備されており、その上に行われたものであったと考えるならばやや納得がいきます。

大山は、同じくこのターム・ペーパーのなかで、ナショナリズムについてもこんなふうには書いています。

現代はナショナリズムの時代である。(中略) 国家存立のこの闘争に応ずるために、それぞれの国家は、党派や階級間の利益のバランスをとりながら、国力を増強するために統一を強化しなければならなかった。内紛を抱えている王国は、他国と十分に競うことはできない。そしてまた国家の威厳を維持するためには、国家は国民の教養を養わなければならない。一方で国力は国の富によって支えられなければならない。そこで商業や産業において国家が活動する余地は十分に存在する。また、不満をもった階級が存在することは、国家の統一と強化に対して大きな脅威であり、それはとりわけ、そういった階級が国民の大多数を占めるときにそうなる。そこで労働者階級を保護することになるのであり、これらのことを考慮に入れると、国家社会主義を正当とすることは首肯すべき。(State Socialism in Germany 邦訳―黒川)

そうした観点から、大山は国家社会主義の一定の正当性を承認するのです。これは、まさに先に述べた、帰国直後の大山の思想をそのまま表したものでした。

また大山は、*The Evolution of the Family System in Old Japan* と「うターム・ペーパー」を書いて、家族制度や女性の地位への関心も示しています。

二年間のシカゴ大学での勉学を終えたときにメリアムが、大山の次の留学先のミュンヘン大学に向けて書いたと思われる推薦状(一九二二年一〇月一日)が残されており、そこには、「彼は勤勉で、聡明であり、彼が手掛けた主題についてすぐれた理解力をもっている」という趣旨のことが書かれています。メリアムが大山を高く評価したことがみてとれます。

大山は、シカゴを離れた後、日本には帰らずにそのままミュンヘンに向かいました。ここでは政治学および国家学

をローテンビユヘルに、国法学をハーブルガーに、バイエルン州の特殊国家学および行政学をデイロフに、財政学をロツツに学びました（前掲「面影」）。しかしおそらくドイツ語の壁もあつたと思われ、ミュンヘン大学時代のものはほとんどノート類が残っておらず、シカゴ時代と学んだ密度は違つたのかと思います。

滞在期間も短くて、一九一四年五月七日には、折から欧米漫遊に出た高田早苗一行と合流し、一行をベルリンで迎えて、その後ロンドン、フランス、イタリア等のヨーロッパを巡っています。さらに九月には一行と別れてアメリカにまた三週間ほど滞在し、ここで一〇日間ほど日本人を対象とする講演旅行などを行つて（高田早苗『半峰昔ばなし』一九二三年、早稲田大学出版部、及び前掲「面影」、同年一月一七日に新橋に到着します）。

（四）大学「立憲主義」化構想の推進と挫折―「早稲田騒動」

帰国後の大山は、大國意識、「一等国」意識に深くとらわれながら、日本の国家的結合をより強固にするためにデモクラシーを提唱し、民本主義の論客として活躍していきます。同時に大山は、社会に対して求めた立憲主義、民本主義を早稲田大学においても実現しようとして改革に立ち上がっていきました。それが、学長を誰にするかという内紛となつて展開された「早稲田騒動」と絡み、大山も巻き込まれていくこととなります。

ご承知のように、この時期は民本主義の時代です。一九一六年一月には、吉野作造が『中央公論』に「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」という論文を書いて、民本主義とは何ぞやということを読みます。それも一つの引き金になって、しだいに普選運動も盛り上っていきました。

大山は、帰国直後の一九一五年一月に、早稲田大学の教授となります。そして大山は、『中央公論』やそれとならぶこの時期の総合雑誌『新小説』、あるいは星島二郎という人が発行する『大学評論』などを舞台に旺盛な執筆活動

を展開していきました。その主張は吉野とほぼ同じ位相にあるのですが、大山の場合には、国家の「倫理的結合」を理想としており、国家の一体化は強制によるものではなく、内側から湧き起こる倫理的結合によるものでなければならず、そのためには個人の国家への積極的な政治参与を引き出すことが必要だとして、それを実現すべく民衆の政治参加ということを説いていきました。

その一方で、一九一七年、「早稲田騒動」がおこります。学長ポストをめぐり天野為之派と高田早苗派に教職員たちが分かれて争うことになったわけです。大山はそもそもその派閥争いに与するつもりではなかったのですが、大学改革の志を高田早苗に託して実現しようとしたので、結果として高田を推すことになって高田側につき、大学改革を構想した若手の教員が「恩賜館」と呼ばれる建物に研究室があったということ、**「恩賜館組」といわれまして、大山もその一人として一連の運動に関わっていくことになりました。**

そもそも、「恩賜館組」の大学改革運動の中心になったのは、大学職員の橋静二という人です（詳しくは、原輝史編「大学改革の先駆者 橋静二一九八四年、行人社を参照。橋は、一九一一年から一二年、早稲田大学の改革のために欧米の視察に出ています、そのときにちょうどシカゴで、留学に来ていた大山と出会い大学論議を交わすこととなりました。そこで橋は、大学はつくろふもの、つまり既存の制度に甘んじるのではなくて、どんどん作っていくべきなのだという志を述べて、その点でも大山と意見の一致をみたとのことです。

橋は、一九一五年に高田早苗が大隈内閣の文部大臣に就任したのに伴って秘書官になります。それで大学を離れるので、この改革論も一時頓挫してしまっていたのです。ところが、一九一六年一月に起こった事件を機に再燃することになりました。その事件とは、大学に大隈重信の妻の銅像の建設計画が持ち上がったことでした。大山たちは、「内助の功」を讃えるものだというところでそれには反対をし、それが火付け役となって、大学改革運動が起こってき

たのでした。「プロテスタント」が結成され、大山がそのリーダーになります。そのメンバーは、大山と、井上忻治・原口竹次郎・武田豊四郎・寺尾元彦・村岡典嗣・北聆吉・服部嘉香・宮島綱男・遊佐慶夫の一〇名でした。大山自身は、大隈内閣に入閣した高田に全幅の信頼を置いていたわけではないのですが、高田が、大山ら「プロテスタント」の改革案を採用するという意向を固めたために、その改革実現の期待を高田に託して、高田を応援することになりました。

この運動の中で五名が離脱して最後に五名が残るのですが、一九一七年九月四日、最後まで志を共にしてきた宮島綱男が解雇されたために、大山、そして村岡、服部も一緒に早稲田大学を辞任するという形で改革運動は敗北してしまいました。

挫折を余儀なくされましたが、そこで大山はどんな構想を練っていたのかということをも、簡単にご紹介したいと思います。

大山が大学構想について書いたものは、以下のとおりです。

「私学経営者の理想」(『新小説』一九一七年九月)／「母校改革の根本方針に関する私見」(『大学評論』同年九月)／「大学と社会」(『新小説』同年一〇月)／「大学生活と思想の自由」(『大学及大学生』(橘が創刊) 同年一月)／「大学と研究と方法学」(同、同年二月)

この一連の論文のなかで、大山は「早稲田大学の決議機関の中心を専門的智識の上に置いた上で、大学運営の「立憲主義」化をはかろうとしました。そして、「単に校友と言はず、一般学生の思想、感情、乃至希望をして此決議機関の上に鋭敏に作用せしめる為に、その間に一種の意思疎通の機関を設定する事の必要なることは、デモクラシーの

主義より観ても当然の事である」と述べます。それは国内政治に対するのとまったく同様に、「然らざれば、相互間に誤解の起つた際に、校友並びに学生の紛擾とか示威運動と云ふが如き忌むべき現象を頻繁に惹起しないとも限らないのである」との危機感に支えられていたからでした（前掲「母校改革の根本方針に関する私見」）。それには大学の経営と学務について専門的知識を有する「教授団及び最高事務幹部」に最も信を置かねばならない。それは、政治は専門的な知識を持った者とアマチュアである民衆が監督することによって行われるべきであるという、まさに吉野と同様の考え方を、大山も大学運営に適用しているのです。とはいえ、大学組織では、寄付者、創立以来の功労者からなる維持員会を排除することは不可能であるため、妥協的ではあるが、維持員会を加えた三者を決議機関の中心にすべきというのが大山の主張でした。しかし、それは容れられることなく、大山は早稲田を去ることになります。

二 「社会改造」の追求のなかで

（一）「社会改造」宣言と「民衆文化」論

早稲田大学を辞めた大山は、一九一七年一二月に、大阪朝日新聞社会部の論説班記者として迎え入れられることになりました。吉野らもそうですが、この時期には大学教員とジャーナリストの間を行き来するといったことはよく行われていました。大山は、取材のために実際に社会に出ていく機会を得ることとなり、そのことについて後年、民衆と向き合うことのできたこの記者時代に、「私は自分の進むべき一生が決定されたことに大きな感謝を抱いている」と述べています（『シベリヤ出兵』論説で発禁処分・『新聞協会報』一九五二年八月一八日）。時の寺内内閣と対峙しながら、しだいに民衆に接近し、民衆に対する信頼を獲得していく過程でした。

しかしながらそれも短期間で終わってしまいました。大阪朝日の進歩的な記者たちが寺内内閣批判を行ったことから、「白虹事件」として知られる言論弾圧事件が引き起こされ、大山は一九一八年一〇月、編集局長島居素川、長谷川如是閑、花田大五郎、丸山幹治とともに大阪朝日を退社し、「傷ける心を抱いて」東京に戻ります（『国家生活の前途と日本国民』・『青年雄弁』一九一九年二月）。

そして、一九一九年二月、長谷川如是閑とともに雑誌『我等』を創刊し、それを拠点にしながら大山は、「民本主義」から次の段階に踏み出して「社会改造」の論陣を張っていきました。

ところで大正デモクラシーは、およそ、日露戦争後に講和反対運動などで民衆が歴史の表舞台に登場してくる時期から「満州」事変ぐらいまでとらえることができますが、それはさらに前半と後半に大きく二つに分けることができます。その画期が第一次世界大戦後の一九一九年で、明治憲法体制の枠組みのなかにあった民本主義の時代から、一九一七年のロシア革命、翌一八年の米騒動を経て、アメリカを中心とするデモクラシー陣営がドイツ専制主義を破り、世界的にもこれからはデモクラシーが席卷していくとの理解のもと、社会運動組織化の時代になっていく、それが一九一九年以後の大正デモクラシー後半の「社会改造」の時代です。その先頭に立って「社会改造」を追求していった知識人の代表的存在が大山でありました。

大山は、「知識階級」論を、これまでと変化させて次のように述べます。

『偉人出でよ』とか、『英雄出でよ』とかの永遠の叫びを続けながら、徒らに宛てににならないものを宛てにして待つよりは、寧ろ国民全体が自ら奮起して、その緊張せる努力に依つて、当面の社会的再調節問題、及び国際的改造問題に対する健全なる輿論を作ることに努めることが必要でなければならぬ（『世界的背景の前に立てる我国の憲政』・『大学評論』一九一九年二月）。

先に述べましたように、かつて大山は、知識人が民衆の指導者となるのだという英雄崇拜論に立っていましたが、このようにいってその考え方から離脱していきました。同時に民衆観も変化させていきます。

私共はデモクラシーの主張者であり、そしてデモクラシーは民衆に対する信任信頼と云ふことを度外して考へられないのであります。そして私共に迫害を加へた彼等も亦、民衆の一部分を構成するものである。故に私共は彼等を憎まずして、寧ろ彼等を教化しなければならない（『国際生活の前途と日本国民』・『青年雄弁』一九一九年二月）。

まだここでは、民衆に対して「教化」するという上からの要素も残してはいるのですが、だんだんに「民衆に対する信任信頼」を獲得していきます。そうして「国民」を一体とみなしていた従来の「国民」像は崩壊し、「国民」のなかに利害対立や階級対立があり、それを前提に民衆というものに信を置いていかなければならないとする立場に変わっていきます。

大山は、一九一九年八月には、「社会改造の根本精神」（『我等』一九一九年八月）という論説を書いて、「社会改造」宣言を發します。大山のそれは、「破壊」ではなく「建設」をもつてその目的とし、それによつて打ち立てられた社会は「民衆の自由なる協調」によるものでなければならぬことが強調されていました。そうして文化の担い手は民衆であるとする「民衆文化」論を説きました。

（二）「科学としての政治学」の提示

大山は、一九二一年四月一五日、早稲田大学教授に復帰します。ふたたび大学で教鞭を執り研究の場を与えられるなかで、「科学としての政治学」の樹立と評価されてきた一九二三年の著書『政治の社会的基礎——国家権力を中心と

する社会闘争の政治学的考察』（同人社）に収れんしていく学問を築き上げていきます。

『国家学』と題するガリ版刷の二一〇頁からなる冊子は、この時期の大山の大学での講義をうかがい知ることのできるもので、講義内容を受講者が文章に起こしてそれに大山自身が目をとおしたものと思われまゝ。最後には、一六題の試験問題も付されていて、講義の様子を生き活きと伝えるものとなっています。以下に述べます『政治の社会的基礎』と内容に類似点が多いことから、それとほぼ同時期のもので思われます。ロシア革命、米騒動に続いて一九二二年には日本共産党が成立し、日本農民組合、全国水平社ができ、まさに社会運動組織化の時代でありました。そういうなかでつくり上げていった学問でした。大山は、これからは「人心の改造」から「制度の改造」に転換していかなければならないといひ始めます。そして彼は、「社会観察における科学的態度」という論文を『我等』一九二二年三月号に書いているのですが、すでにこの論文に『政治の社会的基礎』の骨格が見てとれます。それは詰まるところ「国家の単一性」の否定でした。「理想主義的」な国家観、すなわち倫理的な紐帯で国民の一体性がかれるのだということを、大山自身も第一次世界大戦までは説いていたわけですが、民衆の生活、「生きる」ということに着眼することにより、それはあり得ないという考えに到達していったのです。

自らがかつて依拠していた「理想主義的国家観念」を粉砕していくために大山が依拠したのは、群闘争説でした。これはドイツ留学時代に大山が学んだ学説であり、それがここで援用されているのです。オーストリア学派のグンプロヴィッツ、ラツェンホファー、オッペンハイマーといった人たちであり、それらは、国家には利害を異にするさまざまな群があつて、その群の競争により優勝群と劣敗群の対立が生じ、その抗争をとおして社会が進化していくという考え方をとります。この時点では大山は、まだ二大階級対立を前提とするマルクス主義を十分に学んだ形跡はななく、したがってマルクス主義よりも優れた理論として積極的に群闘争説を採用したというよりは、大山の学んだ知識

の範囲で現状分析に、より有効な理論となるものだったと考えるのが当を得ていると思います。

大山はこんなふうに言っています。現代のプロレタリアートの「解放運動の根源的動機となったものは、どこまでもプロレタリアートの生活事実であつて、そしてその生活事實は資本主義的経済組織が生んだものでこそあれ、解放の理論が生んだものではないのである」(『政治の社会的基礎』)。そういう理論がアプリアリにあるのではなくて、労働の生活事實に依拠していかなければならないという実証主義的な立場がとられているわけです。

以上述べてきました「国家権力を中心とする社会闘争の政治学的考察」という副題がついた『政治の社会的基礎』、これが大山の政治学を代表するもの、当該時期の早稲田の政治学を代表するものというふうにしぼしばいわれてきました。ただし、大山自身はここにどまっつてはいないのですね。一九二〇年代後半には、大山はマルクス主義に接近していきます。

(三) 大学擁護運動の展開

早稲田大学に復帰した大山は、折から学内で起こってきた学生運動とも深い関わりを持っていくことになりました。

ご承知のように、学生運動の起りは、一九一九年の東京帝国大学の新人会で、同じころに早稲田大学でも学生運動団体が結成されます。同年二月に民人同盟会、その一部から発展して同年一月に建設者同盟、そして一九二一年六月には早大文化会というのが立ち上げられています。早大文化会には、日本共産党員で早稲田大学講師であった佐野学と猪俣津南雄がその指導に当たりました。毎週研究会を開いてそれに大山も出ていたそうです。大山は毎週の研究会や春季講習会の講師を務めるなど、かなり熱心にこの運動団体に関わったようです。

一九二三年の軍事研究団事件は、そのようななかで起こりました。まずその前に、一九二三年五月に早大文化同盟が結成されまして、これは日本共産党の影響下にある学生連合会の呼びかけで早稲田の学生たちがつくったものであり、その会長に大山が就任します。同時期にまた、早稲田大学学生軍事研究団という右翼団体が同じく早稲田大学教授の青柳篤恒の指導下にできます。折から陸相宇垣一成の下で、軍縮という名の下に総力戦体制の構築が進められており、それに歩調を合わせる形で「国民的国防の実現」を学生に訴える団体として組織されたのが軍事研究団でした。これと早大文化同盟が衝突しまして、軍事研究団に対する反対運動が展開され流血事件も起こりました。

この両者の衝突のなかで、「もし外部の圧力が加われば加わる程、存続する理由とこそなれ、解散の理由にはならぬ。けれども、此の事件の為に学校を騒擾化すると大変と気遣った」という大山の談話が発表され（『東京朝日新聞』一九二三年五月二二日）、また軍事研究団も大学に累が及ぶことを避けて、双方ともに解散にいたります。しかしながら、その間に負傷者を出すなどの犠牲を伴った事件でありました。

そしてそれが一つの引き金にもなりまして、この年六月には、猪俣津南雄と佐野学の研究室が蹂躪される事件が起こり、そこから第一次共産党事件、すなわち一九二二年に結成された日本共産党が二四年解散に追い込まれるきっかけとなった事件につながっていきます。

こうした研究室蹂躪の暴拳に対して、早稲田大学雄弁会主催で大学擁護後援会というのが組織されます。これには、名前をご承知の方も多いと思いますが、政教社を創った三宅雪嶺、それから経済学・社会政策で知られています福田徳三らが名を連ねており、大山はこの人たちとは一九一九年に知識人の啓蒙団体黎明会と一緒に結成したことがあり、そのつながりだったと思いますが、この後援会でも反対運動を展開していきました。

大山は、「社会科学の自由」の擁護を強く主張しました。どういうことをいっているかご紹介します。科学の「人

生価値からして、研究の自由を要求するの当然の理由を持つてゐるものであれば、その研究の自由を圧迫するすべての外部的勢力に対して挑戦する当然の義務を持つてゐる」。これは、この主題の一連の大山の講演を収録した『大学の使命とその社会的意義』（一九三三年、青潮社）に収められています。大山によれば、「科学の擁護者」は民衆のみであり、それは民衆こそが「生きる」ということを体現している存在であるから、この民衆の利害に密着した生活の視点に立つことが、結局、階級そのものを廃止していくことになる。だから、「科学」を擁護できるのは、人類的な普遍性を持つてゐる民衆なのです。そして大山は、こんなふうに戻顧しています。

私は、あゝした場合には、早稲田大学の一教授としての私の行くべき道と、『我等』に論陣を張つてゐる一人としての私の行くべき道との間に、何等の矛盾のなかつたことを喜んだのであつた（『大学の使命に対する青年学生の態度の変遷』・『我等』一九三三年八月）。

大山は、「民衆文化」論を説いた際に、知識階級が民衆の「ために」するということからいかにして脱することができるのかをめぐり、非常に煩悶した経緯があります。知識人としての負い目ですね。そのころの知識人は、学生運動や労働者・農民の運動が起こってくるのに対してどうあるべきかということが一つのテーマになっており、大山もそこで苦しんだ一人でした。それがここにいたりふつ切れたということだと思います。自分がこの「大学擁護運動」という形で実践運動を担つたことにより、まさに理論と実践を統一する第一歩を踏み出したという充実感を味わつたのでした。

大山は、こうして学生運動に参加する人々の支持を集めていくことになりました。そして、一九二四年五月には、早稲田大学にできました社会科学研究会の会長にも就任していきます。この時代には、大山は広範に学生の支持を集

めて、学生運動と密接に絡みながら影響力を持っていた人物だったのです。

その支持は早稲田大学の学生にとどまらず、当時、明治大学の学生でありました田部井健次は、大山を慕って書生になります。大山の家にならずと書生として住みついて、労農党の運動と一緒にやっつけていきます。一九八〇年代、田部井さんはご存命でしたので聞き取りに伺ったこともあるのですが、そんなふうには、他大学の学生の支持も集めました。だからこそ大山は、権力側から見たら危険人物になっていくわけです。

一九二三年の関東大震災の混乱の渦中で、みなさんご承知と思いますが、大杉栄とその事実上の妻の伊藤野枝、そして大杉の甥橘宗一が、東京憲兵隊麹町分隊長甘粕正彦によつて殺害されましたね。東京の亀戸でも労働運動家たちが殺される事件があり、また民衆の手による朝鮮人・中国人虐殺が関東各地であつたわけですけれども、大山郁夫の暗殺計画もあつたんですね。

関東大震災が起つたときに、大山は房総の千倉にいました。東京に帰つてくるときにもしかしたら連行されてしまふかもしれないというので、高田早苗が大山の安否を気遣つて卒業生を派遣して大山を迎えに行かせ、警察に見せる通行証のようなものを持たせたのです。それで大山は無事、九月七日、新宿区戸塚町の自宅に帰宅することができたのです。ところが帰宅するや否や、陸軍将校たちが押し寄せて、大山とその書生の田部井を、落合の憲兵隊に連行していき監禁したのですが、新聞社が大山の身の危険を察知して行方を捜したために、結局、大山に危害を加えることはできず、大山は、無事に帰ることができたのです。そのような危険に遭遇するほどに大山は、この時期、影響力を持つていたことだと思えます。

三 「理論と実践の統一」の追求——「大山事件」

ここでは、大山がふたたび早稲田を去ることになる「大山事件」について述べます。

関東大震災の混乱のなかで一九二三年九月二日に第二次山本内閣が成立し、この内閣のもとで普選実施声明が出されます。普選間近ということで、無産政党をつくる準備が進められていくこととなり、そういうなかで一九二四年六月に政治研究会ができ、大山はこれに参画します。そして一九二五年、ついに普選・治安維持法体制が成立して、そのもとで無産政党が結成され、最初は農民労働党、これが直ちに解散させられ一九二六年に労働農民党（労働党）ができますが、労働農民党は左派を締め出します。それに対して、単一無産政党を希求する大山は左派の立場を支持して「門戸開放」を要求するのですが、結局、右派、中間派が抜けてしまつて、一九二六年一月二日に労働農民党は左派として再出発し、その委員長に、大山が就任することになるわけです。それはまさに大山にとっては「理論と実践の統一」であり、知識階級の使命を自ら果たしたことになります。

一九二七年二月、大山は、労働農民党全国遊説第一隊として山形に出掛けたのを皮切りにその後全国各地を遊説して回ることであり、そのなかで「これほどの充実した生活は、既往に於て私は知らなかつた。真に労働農民党気分だ！」（『労働農民党の旗の下に！』・『改造』一九二七年一月）とその充足感を語っています。

ところが、右派の社会民衆党の党首に、早稲田大学の同じく教授であつた安部磯雄が就任したことから、党首と大学教授の両立の可否をめぐる問題が起りました。安部磯雄は、一九〇一年に結成された社会民主党のメンバーとしても、あるいは早稲田大学の初代野球部長で現在の図書館の場所にあつた安部球場でも知られていますが、安部は社

会民衆党委員長に就任するに当たって教授を辞め、講師になります。早稲田大学は、同じことを大山に求めたのでした。大山は、一旦それを受けて辞意を表明しますが、大山に対する学生の支持は根強く、それに対する学生の反対運動、大山留任運動が起こってきます。そこで大山は辞意を翻します。

この大山留任運動に参加した学生たちからは退学処分者も出て、いわゆる「大山事件」となります。結果的には、一九二七年一月二六日に政経学部が緊急教授会を開いて、多数決で大山は辞任ということになるのですが、大山はこの件について次のように述べています。

今度の問題は私の辞職云々というよりも、寧ろ教授の政党加入の無条件承認の原則確立にあつたのでそれは早大のみならず全学界の問題であるが理論と実践との関連及び研究の自由の確立を建学の精神とする早稲田が全学界のためにこれを完成しやうい地位にあり且つその使命を持つものと思つた（『早稲田大学新聞』第一一八号、一九二七年一月二七日）。

さらに、一九二七年二月一〇日に早稲田大学の学生たちに対して行つた演説のなかで、次のようにもいいます。

私の立場から見れば、早大に於ける私の政治上の理論の研究と、党に於ける私の政治上の実践とは、相互的に疎通し連関し合つてゐるものであるから、従つて双方が相互的補償の關係に立つ可能性のあるものとさへ思へたのである（『早稲田の学徒に与ふ』・『改造』一九二七年三月）。

彼においては、無産政党運動への挺身は学問研究の連続線上にあるものでした。むしろ狭義の学問をする時間です。失つても、運動のなかにそれを補填してなお余りあるものを見出していたのです。

時間の關係もあり、あとは年表風に追つていくに留めたいと思いますが、大山は一九二八年二月に行われた普選第

一回の衆議院議員総選挙では、労農党委員長として、農民運動が強かった香川第二区から立候補しますが、政府側の熾烈を極めた選挙妨害もあって落選します。一九三〇年二月に行われた普選第二回総選挙では東京五区から立候補して、ここで当選を果たすことになります。

この間、労農党もいろいろと弾圧を受けまして、一九二八年の三・一五事件につづいて四月には治安維持法によって解散を命じられます。労農党は直ちに新党結成に向けて動きだし、一九二九年一月、大山は河上肇・細迫兼光・上村進・小岩井浄らと新労農党を結成して委員長に就任します。ところが日本共産党は途中から合法政党を認めないように方針を転換していて、新労農党と対立することになります。最初は共産党は、自らの合法的な活動の場として労農党のなかに党員を送り込んでいたのですが、コミンテルンが一九二九年の第六回大会で大衆政党否認の方針に転じたため、無産階級の政党は共産党のみでいいということになって新労農党の結成に反対し、大山は日本共産党からは「裏切り者」ということになりました。一九三一年七月、無産政党の合同が行われ、労農党と全国大衆党、社会民衆党の一部の合同により全国労農大衆党が成立した際には、大山は顧問を辞退して「一兵卒」としての参加を宣言しました。

四 アメリカ亡命／戦後——早稲田大学へ

山本宣治という人物をご存知でしょうか。彼は生物学者ですが、第一回普選の際に京都二区から当選し、治安維持法反対運動の陣頭に立ちましたが、右翼のテロで命を失います。この時期には、それと同様に大山の命の危険もありました。

共産党とも対立し、右翼によって命の危険にも晒されるといふ苦境のなかで、大山は、一九三二年三月、妻柳子とともにアメリカに行くという途を選びます。当初は長期に滞在するつもりはなかったので二五歳の息子も日本に残し、六カ月間ぐらい世界情勢見聞をするぐらいの気持ちで出発したのでした。渡米当初は、『中央公論』にアメリカ情勢の記事を書いていまして、そんなふうにして半年ぐらいしたら帰ってくるつもりだったわけですが、戦局の悪化のもとで帰国のタイミングを失って、一九四七年一月まで滞在することになりました。

この間大山は、シカゴの郊外にありますノースウエスタン大学のケネス・W・コールグロブという教授の庇護を受けまして、そこで、美濃部達吉の『憲法精義』や『憲法撮要』などの英訳をしています。アメリカがゆくゆく日本を占領し日本の憲法をつくっていくときには、美濃部の憲法論を参考にする必要がありますがあり、それに供するための仕事でした。また、トーマス・ピッソン、オーエン・ラティモアら、中国国共合作と中国支援を行うことを考えていたアメリカ・グループは、日本の敗戦の暁には、大山が、侵略戦争に反対した自由主義者として日本の指導者になることに期待を賭けていました。

大山は妻と共に一九四七年一月によりやく帰国します。日本の敗戦からすでに二年が過ぎており、帰国が遅延した理由は、一つには、アメリカ共産党との接触があったこと、もう一つは、大山の仕事であった『憲法精義』英訳が未完成であったこと、であったようです。一月二八日には早稲田大学主催帰国歓迎大会が大隈講堂で開催され、三五〇〇人が集まりました。

大山は、帰国の翌一九四八年四月に三たび早稲田大学政治経済学部教授に迎えられて、一九五一年三月の定年まで勤め、一九五五年一月三〇日、硬脳膜下血腫により七五歳の生涯を閉じました。

その間には、一九四八年八月に国際問題研究所を設けてそれを拠点に、原子力の平和利用を国際連合に期待しつつ

平和運動に専心しました。また、一九五〇年二月には、青野季吉・秋田雨雀・大内兵衛らと「平和を守る会」を結成し会長に就任しており、これが同年八月には平和擁護日本委員会に発展改組し、引き続き会長を務めます。同年六月には、京都民主戦線統一会議の支援により、参議院議員選挙に京都から立候補して当選も果たしました。

戦後は、戦前の日本共産党との対立を教訓に「不偏不党」を掲げてきた大山でありましたが、これらの表舞台での華々しい活躍により、一九五二年一月にはスターリン平和賞を受賞することになりました。

以上、非常に駆け足で、大山の生涯を、早稲田大学との接点を軸にしながら追ってきました。大山は、社会運動、民衆の成長とともに、自分の思想をも変化させていった思想家であり、大山を追うことでまさにその当該時期の民衆運動の変化が見てとれると思います。大山は、民衆の「生きる」あるいは「生活」ということに正面から誠実に向き合った知識人の一人なのではないかと思えます。今はあまり知られることのない存在になりましたが、そうした知識人がいたことを、皆さんの頭の隅に置いていただくことになれば幸いです。

時間になりましたのでこれで終わりにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

参考文献

- ・『大山郁夫全集』全五巻（一九四七～一九四九年、中央公論社）
- ・大山郁夫記念事業会編『大山郁夫伝』（一九五六年、中央公論社）
- ・堀真清「大山郁夫―民衆政治家の偉大と悲慘」（『近代日本の思想』第三卷、一九七八年、有斐閣新書）
- ・『大山郁夫（評伝・回想）』（一九八〇年、新評論）
- ・『大山郁夫著作集』全七巻（一九八七～一九八八年、岩波書店）

- ・藤原保信『大山郁夫と大正デモクラシー』（一九八九年、みすず書房）
- ・早稲田大学現代政治経済研究所編刊『大山郁夫関係資料目録』（一九八九年）
- ・黒川みどり『大山郁夫関係資料について——大山家寄贈資料を中心に』（一九八九年、早稲田大学現代政治経済研究所）
- ↓早稲田大学現代政治経済研究所編『早稲田大学現代政治経済研究所蔵大山郁夫関係資料目録』、マイクロフィルム（二〇〇〇年、雄松堂出版）
- ・黒川みどり『共同性の復権——大山郁夫研究』（二〇〇〇年、信山社） ※本稿の内容ならびに典拠等の詳細は、同書を参照していただくと幸いです。